

Les Diaboliques: Jules Barbey d'Aurevilly



紀田順一郎＋荒俣宏
責任編集

世界幻想文学大系⑧



世界幻想文学大系

責任編集—紀田順一郎・十荒俣宏

第八卷

魔性の女たち

昭和五〇年八月一日印刷 昭和五〇年八月一五月初版第二刷発行 昭和五六年五月一五月初版第二刷発行

著者—ジュール・バルベール・ドルヴィイ

訳者—秋山和夫

発行者—佐藤今朝夫 発行所—株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨三五一八 郵便番号一七〇 電話〇三一九一七八二八七 振替東京五—六五二〇九

造本—杉浦康平・鈴木一誌

印刷—セイユウ写真印刷株式会社・凸版印刷株式会社 製本—大口製本印刷株式会社

定価—二、四〇〇円

●—落丁本・乱丁本はおとりかえします

秋山和夫 あきやまかずお

一九四七年、埼玉県生れ。

東京大学文学部卒業後、

同大学院博士課程(比較文学)

終了。現在、

千葉大学助教授。

専攻 比較文学。

主要訳書—

ノディエ『スマラ—または夜の悪魔たち』

森開社、一九七四年。

ドレミュ編、フランスSF選

『青い鳥の虐殺』(共訳)

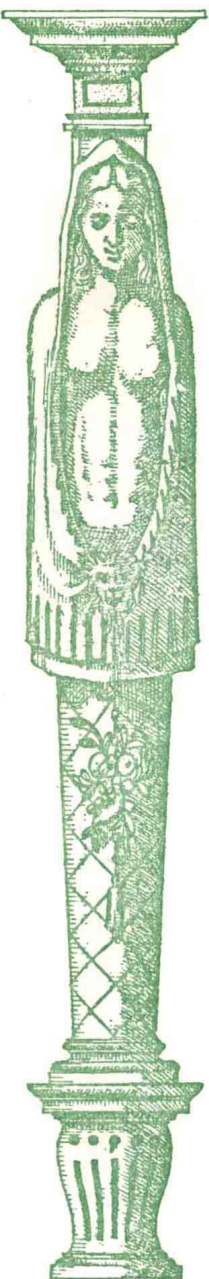
白水社、一九七八年。

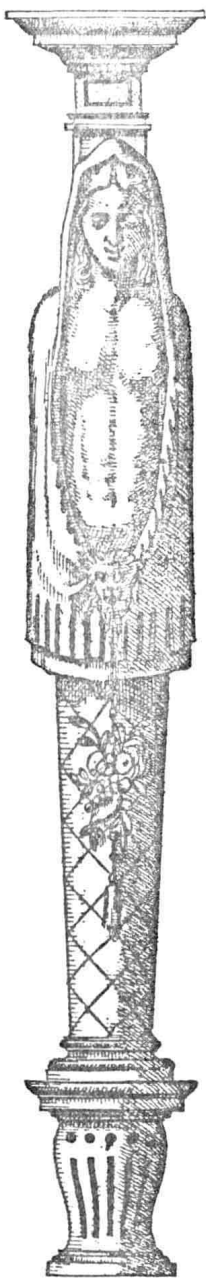
ドフォントネ『カシオペアの心』

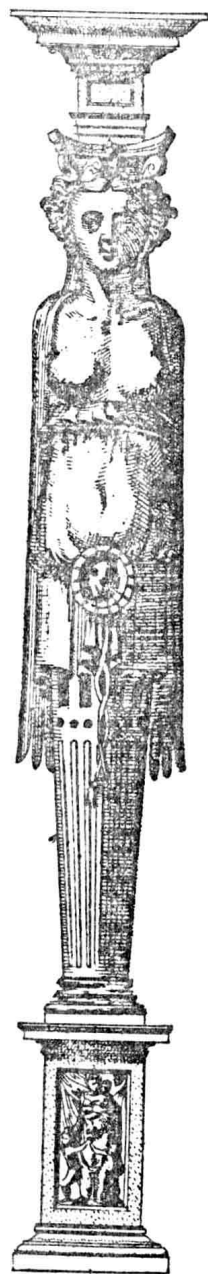
国書刊行会、一九七九年。

ジャン・レイ『幽霊の書』

国書刊行会、一九七九年。

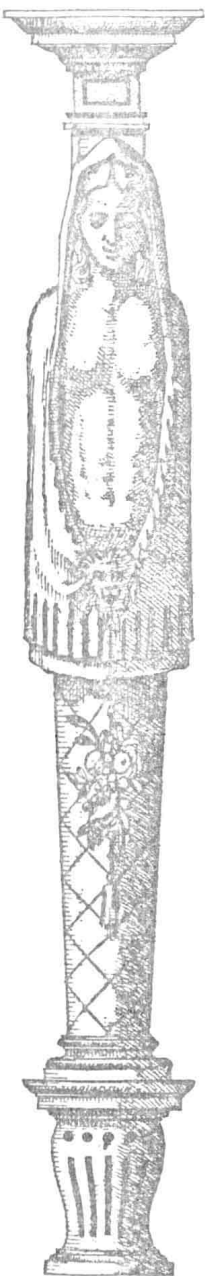






魔性の女たち

ジュール・バルベール・ドールヴィイ——秋山和夫訳



目次



7 魔性の女たち ジュール・バルベール・ドールヴィイ

8 序文

14 深紅のカーテン

94 ドン・ジュアンの最も美しい恋

136 罪の中の幸福

222 ————— ホイスト・ゲームのカードの裏側

300 ————— 無神論者たちの饗宴にて

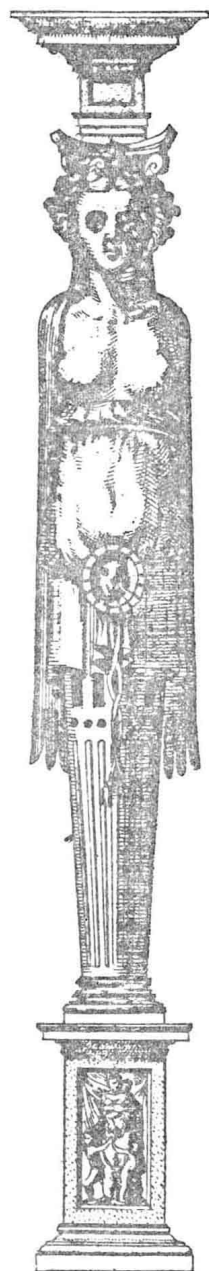
404 ————— 或る女の復讐

471 ————— ジュール・バルベール・ドールヴィイをめぐって ——— 秋山和夫

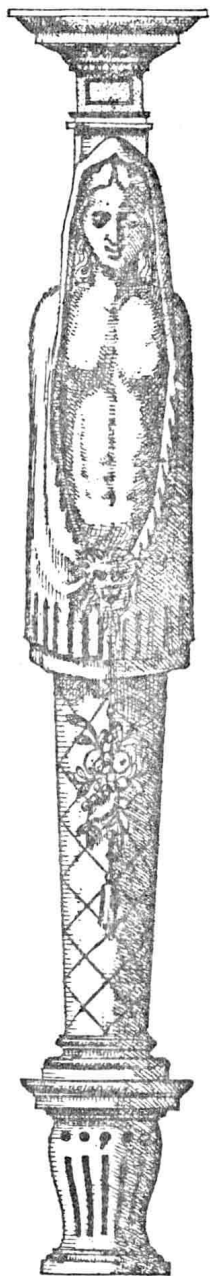


誰にか本書を献ぜん？

—— J・バルベール・ドールヴィイ



魔性の女たち



序文 * 1



ここにまず最初の六篇を発表しよう！

もし大衆がこれらに理解を示し、嗜好にかなったものと認めたなら、近いうちに別の六篇が発表されよう。もともとこれら罪ある物語は——ダーズの桃と同じく——十二篇をもつて一つとなるのである！

『魔性の女たち』という題名によつて明らかなように、これらは、祈禱書、あるいは『キリストのまねび』*2 たらんとする意図を持つものではない……。しかしこれらはキリスト教徒たる一道徳家の手によつて書かれたのである。とにかく彼は、たとえいかに大胆なものであるにせよ、真の観察眼を有しておると自負し、——彼にとつて詩法でもあるのだが——巧みな画家は全てを描きおおせ、しかもその絵はそれが悲劇的であるとき常に充分に道徳的となり、描かれた事物の恐怖を表現するものと、信じているのである。不道徳なるものは、不感無覚の徒および冷笑家にのみあるのである。さてこの作者であるが、彼は悪魔の存在を、またこの世におけるその影響の存在を信じており、それを一笑に付してしまふことはない。そして、ひたすら戦慄を喚起せんがために、

純な魂を持つ人々にこの物語を語るのである。

この『魔性の女たち』を読み終えた後で、今度はそれらを現実の行為の中でやり直してみようなどという気を起す読者があらうとは筆者も思っていない。そしてそこにこそ、本というものの道徳性があるのである……。

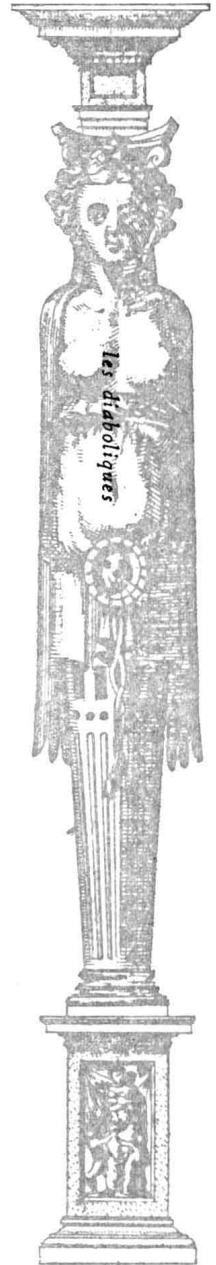
名誉に関してはここまでとし、今度は別の問題に移ろう。何故作者は、これらの小悲劇群に、まこと響きの良い——あるいは良すぎるかも知れぬが——『魔性の女たち』という名を、無造作に与えてしまったのだろうか？……それは、ここに掲げられている物語に対するものであらうか、それとも、これらの物語に登場する女性たちに対するものであらうか？……

これらの物語は、不幸なことに真実なのである。そこには何も創作は無い。ただ登場人物たちの本当の名は明かさなかった、それだけである！ 登場人物たちに仮面を被せ、それから衣服を取り払ったのである。真の名前を持ち出さなかったことを責められた

＊１—バルベールは一八七〇年にも序文と草している。それはここに訳出した一八七四年の初版の序文のいわばスケッチの役割を果たしている。
＊２—ドイツの神秘思想家トマス・アケンピス（一三八〇—一四七一）の作とされているラテン語で書かれた信仰書。

各国語に訳されて聖書に次いで読まれた。

魔性の女たち



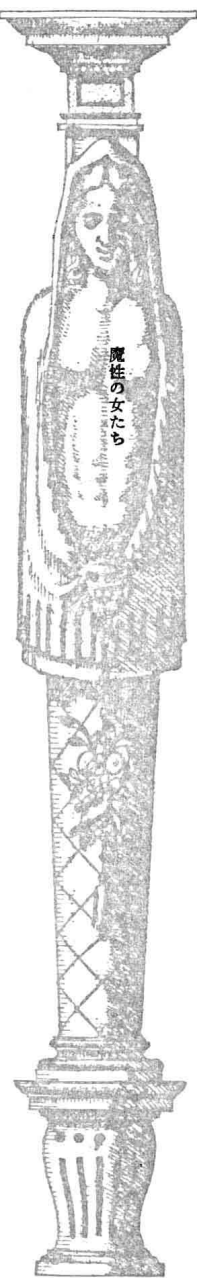
とき、カザノヴァは、『アルファベットは私のものである』と言った。小説家にとつてのアルファベットは、情熱を抱き、冒険を経験したあらゆる人々の生なのである。従つて、慎重に、かつ深遠なる技倆を駆使してそれらのアルファベットの文字を組み合わせるのが問題なのではない。また、必要な予防措置が取られているとは言えこれらの物語には激しい活力が溢れているのだがさりとて『魔性の^{ダイアボリック}』という表題に惹かれたとは言え、それらが自ら誇っているほどには悪魔的^{ダイアボリック}でないとされる鋭い頭脳の持ち主もさだめしおられることであらう。彼らは、新しい趣好を、筋の錯綜を、巧緻を、洗練を、そして至る所小説の中にまで入り込んでゐる近代のメロドラマ的な戦慄を期待するであらうが、それら愛すべき人々は、その期待を裏切られるであらう！……『魔性の女たち』は、魔女の登場するお芝居ではなく、魔性を扱った——つまり現代の、進歩と甘美にして神々しい文明という時代が生み出した真実の物語なのであり、それ故、ひとたび思い切つてこれを書こうとする人間には、つねに、これを書き取らせてゐるのは悪魔ではないかと思われてくるのである！……悪魔は、さながら神のごとくである。マニ教・1は、中世における様々の大いなる異端の源泉であつたが、さほど荒唐無稽なものではない。最も簡潔な手段を用いることによつて神はそれと知られるとマールブランシュ・2は語っていたが、悪魔もまた然りである。

この物語の中の女性たちについて言えば、彼女たちがどうして魔性の女^{ダイアボリック}たちでないことがあろうか？ この甘美なる名に価する魔性というものを、彼女たちはそれぞれの性格の内に充分秘めていないとでもいうのだらうか？ 魔性の女たち！ ここには何らか

の意味で魔性を帯びていない女というものは一人として居ないのである。そしてまた、何の誇張もなく、『わが天使よ!』と真剣に呼びかけられない女も一人として居ない。地獄に堕ちたとはいえ天使であつた悪魔と同じく——彼女たちが天使であるとすれば、それは悪魔の場合と同じであるから——頭を下にしておるとはいえ……残りは、天上にあるのである!ここに登場する女性たちには、純潔で有徳で無垢でない女は一人として居ない。見方を変えれば怪物ともなりかねない彼女たちは、取るに足らぬ道徳や良識に対しては、実際の効力を發揮するのである。そしてその意味からも、彼女たちは、期待を裏切ることなく、『魔性の女たち』と呼ばれ得るであろう……。作者はもともと、これら貴婦人たちのささやかな陳列館を建てようと目論んでいたのであつた——それは、たとえもつとささやかなものとなるにせよ、彼女たちとこの社会の中で対応し対立する貴婦人たちの陳列館を建てる心算があつたからであつた。なにごとにせよ、ものには二つの面があるからである! 頭脳に二つの頭葉があるように、芸術にも二つの相がある。自然は、片方は碧い眼、片方は黒い眼をしたこれらの女性たちにも似ている。そして、インク——それもささやかな徳というインクで黒く眼を描かれた女性たちがここに居るのである。

★1—ベルシアの拜火教に仏教やキリスト教の要素を渾然とさせた信仰。三世紀頃マニが開き、十二世紀に至るまで行なわれた。

★2—フランスの哲学者(一六三八—一七一五)、デカルトの流れを受け継いで所謂万有在神論を説き、スピノザ的汎神論に結びつく地位にあると云われている。



魔性の女たち



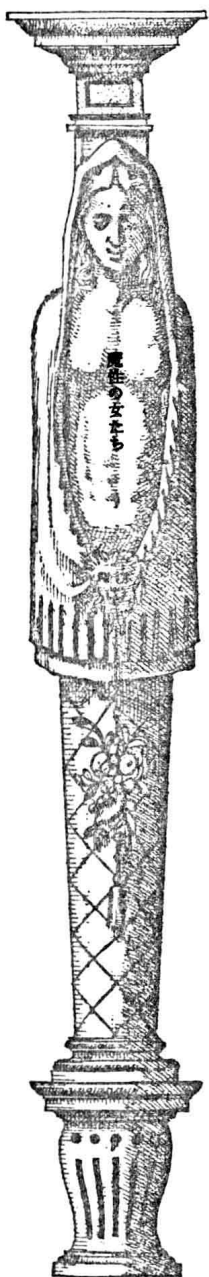
おそらくは、やがて碧^{あお}い眼が描き加えられるであろう。

そしてその青が、充分に純粋なものであると思われたとき、この『魔性^{レイ・イ・ア・ボリ}の女たち』の後には、『天使^{ケ・レ・ヌス}のような女たち』が現われるであろう……。

だがそうした女たちが果して居るものであろうか？

ジュール・バルベール・ドールヴィイ

一八七四年五月一日、パリにて。





深紅のカーテン

Really

もう遙か以前のことですが、私は、水禽の狩猟をするため西部フランスの沼沢地帯へと向っていました。——途中通らなければならぬ地方には当時まだ鉄道が敷かれていなかったもので、私は、リュエューの城の街道合流点を通る***の乗合馬車に乗っていたのですが、ちょうどその時、その箱馬車には、一人の人物が乗り合わせていただけでした。あらゆる点で際立ち、また私も何度となく社交界で出会ったことのあるこの人物。この人を、ド・ブラッサール子爵と呼ぶのをどうかお許し下さい。おそらくは無用の心配でもありません！ なにしるバリの社交界に名乗りをあげている人々の内でも数百人が、この場合、彼の本当の名前を冠するにふさわしいのですから……。時は、夕方、およそ五時頃でした。太陽は、もはや勢いの衰えたその光を、平原とポプラの樹々に縁取られた埃だらけの街道に投げかけており、その街道の上を、私たちを乗せた四頭立ての馬車が全速力で突き進んで行くのでした。私たちは、駆者が鞭を当てるたびに馬の尻の逞しい筋肉が重々しく盛りあがるのを眺めていました。駆者——それは、旅立ちの最初の一鞭を、つねに余りにも高く響かせる人生の写し絵そのままではありませんか！